

〔論文〕

地域と子育て家庭と大学をつなげるアート

村上 佑介・山田 千智・弘田 陽介

1 はじめに

乳幼児をもつ保護者が子育てに安心感をもつためには、地域コミュニティによる支えが不可欠である。このような認識が社会において共有され、各地域で様々な試みが行われている。2015年4月からの「子ども子育て支援新制度」においても、公的な財源に基づく子育て支援のさらなる拡充が謳われている。

本稿執筆者は、このような近年の子育て支援の意識の高まりおよび制度の向上を受けて、地域と家庭と大学をつなげる試みを行っている。具体的には、地域において子どもとその保護者が共に楽しめる造形や音楽のイベントを実践することで、アートを媒介としたコミュニティの形成を図り、地域の活性化や、子育て支援としての芸術表現のあり方を検討するものである。アートを媒介にする理由は、造形や音楽がいわば理屈抜きで多様な子育て層に興味をもって受け入れられ、一緒に楽しむことができるため、興味を核にしたコミュニティが生まれやすく、その後家庭においても持続的に楽しんでもらえることを、本稿執筆者は想定しているからである。

造形の素材に触れることやリズムやメロディに乗り歌い踊ることは、身体的な活動である。触れる、歌う、踊るといった素材と身体の直接的な融合感覚は、素材との一体感だけではなく、一緒にその活動を行う他の参加者との一体感を生み出す。このことは熱気のある祭りやイベントに参加したことがあれば、誰にでも分かることだろう。音楽や踊りは祭りやイベントの核となるが、それらは生活から離れた非日常の身体経験でもある。そして、装飾を作り、それで自らを飾ることは日常の場所を非日常へと転換する。また、身体に様々な装飾を加えて、日常では体験できないような感覚を味わうことは子どもと保護者の結びつきを強めるものである。

本稿執筆者は、そのような身体的な一体感および身体と空間の変容感覚というものをアートの基底に置き、子どもと保護者、家庭と地域のつながりを深めていくようなアートを媒介に、大学をも含めた地域と家庭の結びつきを強めていくことを考えている。

具体的に本稿で描かれる共同研究の目的を述べる。大学の教員（本稿執筆者）がアーティストおよびファシリテーターとして、「親子で楽しめるアート」を次の①～③において展開する。

- ①大阪城南女子短期大学近隣の駒川商店街に設置した同大学の子育て支援スペース「JONAN子ども広場KOMAクル」での定期的なアートイベント
- ②大阪城南女子短期大学と共同して地域活動を行う浄土宗應典院でのアートイベント「KIDS MEET ART（キッズ・ミート・アート）」

③大阪城南女子短期大学の併設園である城南学園幼稚園および大阪市天王寺区のパドマ幼稚園での「子どものためのクラシックコンサート」

この大学が契機となり行われる三つを具体的な活動として、地域と子育て家庭を、アートを媒介としてつなげていく。そこでは参加者の芸術に対する知識や技術の向上そのものを目的とするのではなく、親子間のコミュニケーションや、身近な地域に目を向けるといった、芸術活動から生まれる副次的な成果を、主眼としている（図1）。

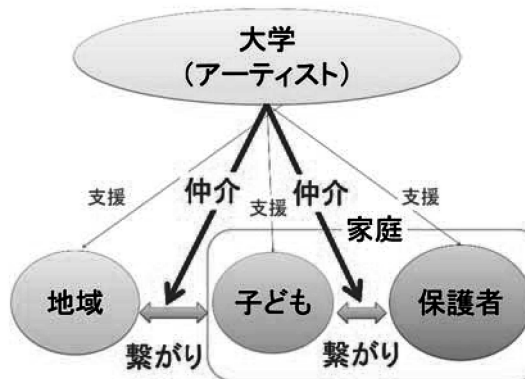


図1 地域と家庭に対する大学のアプローチ

なお、本稿の執筆分担は、造形実践などについてを村上、音楽実践についてを山田、そしてイベントのコンセプトや施設の説明などについてを弘田というようになっている。ただし、これらは大まかな分担であり、実際の記述は一人の執筆者の記述に他の者が上書きするなど数回のやり取りによって書かれている。

2 「JONAN子ども広場KOMAクル」での実践

大阪市東住吉区・駒川商店街内にある「JONAN子ども広場KOMAクル」は、「子どもと保護者を包括的に支える商店街内子育て拠点〈JONANこどもひろば〉づくり事業」（当初は大阪府補助金にて運営、2015年より大阪城南女子短期大学（以下、「城南短大」と表記）が運営）での子育てサポートの拠点となっている。現在、月・水・金曜日の午前10時から4時間開場している。地域の乳幼児をもつ保護者が一回平均で10名程度来場し、スタッフと一緒に制作や談話をしたり、買い物帰りに休憩をしている。このKOMAクルについては、その設立の経緯からを記したものがある¹⁾。

この「JONAN子ども広場KOMAクル」では、身体的な一体感を実際に体験してもらうような、「触覚感」と「身体変容」という素材を取り巻く二つのテーマを基にワークショップを行った。

2-1 素材との出会いによる「触覚感」と「身体変容」

(1)「触覚感」を意識したワーク

幼児期の子どもたちにとって触覚は、非常に重要な認知手段であり、研ぎ澄まされた感覚である。彫刻家の佐藤忠良氏は「人間は生まれた瞬間から、触覚によって人生が始まります。生まれたばかりの赤ん坊は、目が見えないから、母親に触って、自然におっぱいを吸うようになる。これは完全な触覚の世界です」²⁾と、人は触ることから人生が始まっていると述べている。しかし、大人へと成長するにつれて、視覚に頼りがちになり、物を触って認識することが減り、触覚がおろそかになっていく。子どもの頃楽しんだ、「触覚感」³⁾から遠ざかり、感覚が衰えていくのだ。つまり、指や掌などを用いて直接的に加工する素材を親子が共通して使用することは、子どもにとっては、人生で最も発達している段階の感覚を使用した制作ができ、大人にとっては、衰えた感覚をとり戻す機会、言うなれば触覚回帰を促すものなのである。ここでは、素材との出会いにより、触覚感を刺激するような以下のプログラムを実施した。

①「水粘土を使ってオブジェを作ろう」

このワークショップは、水粘土（彫塑用粘土）でオブジェの原型を作り、その型に石膏を流し込み、硬化させた後、型から取り出して石膏のオブジェを作るというものだった。ワークショップ当日は、多くの親子連れで賑わった。大人も子どもの作品のサポートを行いながら、自身も作品制作を熱心に取り組んでいた。多くの親子の参加につながった理由としては、主旨とした、“素材との出会い”つまりは、普段触れることのない素材の使用が挙げられる。参加者は幼児と、その保護者であったが、小学校までの学校現場で粘土と言えば、油粘土もしくは紙粘土が主流である。様々な素材がある中で、それら以外の粘土があまり使用されていないことは、今日の学校現場における立体造形教育の問題とも言えるが、その影響からか、普段とは違った体験を子どもたちにさせようという思考が保護者に働いたことは想像に難くない。また、大人も制作時の様子を見ると、普段扱わない水粘土の滑らかで冷たい肌触りや、練ったり、ちぎったりする大人にとっては久しぶりの感覚を、童心に戻って楽しんでいたようであった。(2015年8月27日)



写真1 ワークショップの様子(1)



写真2 ワークショップの様子(2)

② 「クリスマスキャンドル制作」

このワークショップでは、ジェルワックスという透明な素材を使用し、クリスマスキャンドルを作った。制作プロセスはジェルワックスを温め、溶かし、ガラス瓶に注ぐというものである。その際にクリスマス関係の小さい人形やキラキラする紙片、そしてろうソクの芯を入れて、冷えると完成する。ジェルの溶ける感覚や温かさ、硬化した際の弾力など、制作過程で起きる素材の変容を肌で感じることができた。

熱したジェルを注ぐ作業は、危険なので大人が行ったが、子どもはそれをやや緊張した面持ちで見ていた。また小物を選び、瓶に入れるのは子ども主体で行った。このような大人と子どもの役割の分担は、子どもの協同性を育み、大人への敬意を養うものかもしれない。また、このジェルのクリスマスキャンドルは通常購入すると1000円程度するとのことであるが、このワークショップでは材料費を100円徴収する形で行った。内容的にも、またリーズナブルであったという点でも保護者には大変好評で、来た甲斐があったという声も聞かれた。(2016年12月23日)



写真3 製作したジェルキャンドル



写真4 ワークショップの様子

(2) 「身体変容」を意識したワーク

素材の力によって自らの身体を変容させることは、子どもたちが、まだ出会ったことのない自分や、内なる自分を開放することである。自らの身体を飾り、身体を非日常化するとともに、子どもがいる場所も非日常の場に転換する。このような非日常の身体こそが、生活の場に変化を与え、コミュニティを活性化するものである。

また、身体の様々な部分で素材に触れることは、全身の触覚を使用した、正に「体感」と言うべき行為である。触覚感と同様、身体変容による体感は、子どもたちの感性を育む重要なファクターである。普段と違う体感は、普段と違う自己を生み出す。このような非日常の自己は普段とは違う保護者との接触を生み、生活の基盤となる家庭に新たな活力を与えるのである。

① 「フェイスペインティング&ネイルアートinハロウィン」

フェイスペインティングとネイルアートの専門家4名を招き、子どもと保護者が自らの体をキャンバスにして彩色していった。近年、ハロウィンが一般に定着し、盛り上がる傾向もあり、商店街でもこの日は子どもが協賛店舗に入り、「トリックオアトリート」と言うと、お菓子をもらえると

言うイベントを行っていた。このイベントと連動して考え出されたのが、この「フェイスペインティング&ネイルアートinハロウィン」企画であった。

子どもたちもこぞって、フェイスペインティングをしてもらい、そのままの姿で商店街に繰り出していった。また保護者は、ネイルアートをしてもらっていたが、これも市場での価格と比べると格安の500円で受けることができるため盛況であった。保護者がしてもらおうのを見て、子どもも一緒にしてもらおうという光景も見られた。

子どもたちは非日常の装いで商店街に出ていき、商店街の店主たちと交流を行っていた。仮装した子どもたちがあちらこちらと歩きまわること、商店街にいわば非日常の花が咲き、高齢化が進む街も一時活性化するような感覚が執筆者たちにも受け取られた。また、子どもたちも自己の身体の変容をめぐる、コミュニケーションをする様が見て取れた。執筆者たちが考えるような非日常への身体変容が、まざまざと具体化した企画であったと言えるだろう。(2016年10月31日)



写真5 ネイルアートの様子

② 「プラスチック廃材でアクセサリー作り みんなでHai-zai×Art」

アクセサリー作家の藤本加奈氏、小林直美氏と共に、東住吉区のプラスチック工場から生まれた廃材を利用して、レジンアクセサリーを作った。このレジンとは合成樹脂であり、これを用いたアクセサリー制作が現在、流行の兆しを見せているが、材料や制作道具を揃えて少し楽しんでみるにはなかなかハードルが高いものである。

このワークショップは、ひとまず気軽に楽しんでもらうことをコンセプトとした。乳児を膝の上においても作業できるように安全面に配慮した。来場した保護者と子どもは、試行錯誤しながら、たくさんある素材を用いて、アクセサリーを作った。その後は、それを着けて、お互いに講評し合うことを楽しんでいただいた。(2017年3月15日)



写真6 アクセサリー作りの様子

③ 「おしゃれな帽子やマントをつくってあそぼう！」

絵本作家のあおきひろえ氏を招き、紙袋や包装紙、リボンなどを使い、個性豊かな帽子やマントを作った。子どもたちは素材を選び、思い思いに着飾っていった。あおき氏は材料をわざわざ買わずにできるように、デパートや贈答品の包装紙、袋などを使ったが、このことによって、アーティスティックな作品ができることを子どもと保護者に示してくれたと考えている。

作品完成後は、子どもたちとおおき氏は商店街を練り歩き、簡単なファッションショーを店主たちに対して行った。こちらも商店街店主からは好評であり、街に彩を添えたと言えよう。(2017年3月22日)



写真7 ファッションショーの様子

3 「KIDS MEET ART」での実践

3-1 つながりとすれ違い

「KIDS MEET ART」は、大阪市天王寺区にあるパドマ幼稚園および浄土宗大蓮寺塔頭應典院にて行われているアートイベントである。「子どもとおとなが一緒に楽しむ創造の場」をテーマに、子どもの感性の豊かさと、アートに潜む「インファンス（言葉にならないもの）」をつなげることを目的としている。2013年8月から2017年まで毎年開催されているが、各回平均来場者は400名を超え、大阪市内で行われる子ども対象のアート・ワークショップイベントとしては定着してきている。

このイベントは、あえて、子どもがそのまま喜んでくれるようなワークショップではなく、一捻りが加えられたり、または子どもが一抹の違和感を抱くようなものをそのコンテンツとしている。ここにこのイベントの肝があり、子どもとアートが出会い、またすれ違っていくようなことをもくろんでいる。今ここにいる子どもに向けてではなく、その子どものその後の人生に向けて、このすれ違いが設定されている。

そのようなことから、造形制作や音楽にとどまらず、武術・ボディワークやコンセプチュアルな演劇など、子どもとアートの接点を広げ、すれ違いを引き起こすようなプログラムが設定されている。こちらについてもすでに立ち上げの経緯およびその後の展開について、本稿執筆者たちが論じたものがあるので詳細に関してはそちらを参照していただきたい⁴⁾。

3-2 “地域とのつながり”と“親子のつながり”

(1) 「心の中のおじぞうさま～粘土を使ってお地藏様を作ろう～」

このワークショップは村上が主となり行ったものである。実施内容としては、参加者一人ひとりの心の中にある、自分を支えてくれているものや、守ってくれているものをお地藏様に見立て、それを粘土によって具現化していくといったものであった。樹脂粘土の粘着性が高く、子どもたちは少し扱いづらそうであったが、保護者の手を借りることで、制作を進めていった。保護者たちは、子どもたちの作品に注意を払いながらも、久しぶりの粘土の感触を味わいながら、楽しそうに制作

を行っていた。完成作品は、動物や電車、鬼、ハートの形のお地藏様など、子どもたちの豊かな発想力の基、従来のお地藏様の枠にはまらないようなものであった。

また、作品完成後、出来上がった作品を目の前に置き、寺院の副住職である秋田光軌氏を中心に制作の感想や作品に込めた思いなどについて対話する時間を設け、最終的にはそれぞれが屋外の好きな場所に完成作品を設置していった。幼稚園や寺院の敷地を案内し、好きな場所に展示して構わないという説明を行ったが、ほとんどの参加者は幼稚園園庭にある小さなお地藏様、もしくは寺院の入り口の六地藏様の周辺に作品を設置した。

全ての作品を設置後、作品とお地藏様の前で手を合わせ、「なむあみだぶつ」と全員でお念仏を唱えた。参加者たちは、少しの間目を瞑り、いつも自分たちを見守ってくれているお地藏様や心の中の大切なものに感謝の気持ちを伝えた。



写真8 粘土でのお地藏様制作の様子



写真9 実際のお地藏様前で展示も

プログラム終了後、参加者に対し、以下のような質問項目を記入したアンケートを行った。

〈質問項目〉

設問1：性別を教えてください。

設問2：年齢を教えてください。

設問3：本日はどなたと来られましたか。

設問4：これまでに「KMA」に参加されたことはありますか。

設問5：完成作品をご自身で選択した場所に展示してみてどのような印象を受けましたか。

設問6：今回のワークショップに対する自由な感想をお書きください。

以上の6項目であるが、1～4の項目は属性設問の項目であり選択式に、主の設問である5、6は記述式とした。アンケートは大人12名を対象に行い10名（男性：5名、女性：5名）の回答を得られた。

詳しい分析結果に関しては、前述の先行研究（村上佑介「サイト・スペシフィックなワークショップの実践 ―キッズ・ミート・アート2016の事例―」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第51巻、2017）に記載しているため、本稿では詳しく触れないが、設問6の自由記述には、「園の授業とは違い、

自由な考えで取り組ませていただきました。』(40代：女性)や「家ではなかなか体験することができないので、親子で良い体験ができました。』(30代：女性)など、普段できない体験を行えたことに対する満足感を述べているものや、「家族で体験できたことが良かった。」といった主旨の感想が多く見られた。このことから、親子が共に新しい素材との出会い、共有することが、イベント全体の充実感へとつながっていたと言える。

(2)「想像の木・創造の木」

このワークショップも村上が主となり行ったものである。このワークショップでは、様々な形の枝や葉を組み合わせ、立ち木ではなくなってしまった木に、もう一度、作品としての「木」の命を宿す試みであった。

具体的な活動としては、素材となる木の枝や葉を自ら採集し、それらをホットボンドで組み合わせて、「木」を形作るというものである。ホットボンドは参加者にとってはあまり馴染みのない道具であることが想定されたが、普段手にしないような未知なる道具との出会いも体験させたいと考えた。主素材には、会場内にある桜の木を剪定した際に落ちた枝を選択した。それに加え、他所からではあるが、楠やつつじなど、別の種類の枝を用意し、より大きさや形に幅をもたせた。

また、最終的に出来上がった作品を、参加者が設置場所を選び、設置することで、素材が再び場に帰っていくことができるようにした。素材の採集、制作、設置という一連のプロセスを、できるだけ参加者が主体的に行えるようにすることで、より参加者の意志が反映されたプログラムになることをねらいとした。

参加者の様子を制作過程に沿って見ていきたい。まず、筆者が参加者に素材の一部となる落ち葉を館外に取りに行くよう説明を行い、参加者は境内に落ちている様々な色や形の木葉を採集した。子どもたちは、色や形の異なる木の葉を、楽しみながら採集し、大人たちは落葉している葉の数に驚いている様子だった。別々の種類の葉を10枚以上拾う参加者もいる一方で、なかなか使う葉を決められず、2、3枚で終えてしまう人もおり、この段階から、それぞれの個性が表れていた。

採集後、部屋に戻りあらかじめ筆者が準備していた木の枝を、必要な分だけ採集した。細く柔らかい枝を好む参加者もいれば、太く大きな枝ばかりを選んだり、長い枝を自らの必要な長さに切ったりする人など様々であった。枝を選択し終えた後、ホットボンドを使用してそれらを接着していった。子どもたちは初めて手にする道具に興味津々の様子であった。ホットボンドを使用しても、枝同士が上手く接着できず、苦勞する子どもたちの姿が見られたが、保護者の手を借りながら、自身の理想の形に近づくように、一生懸命組み立てている様子であった。また、大人も子ども以上に制作に熱中している様子で、会場からは「シンプルだけど、思った以上に没頭できる。」という声があった。一通り、木の枝を組み合わせたあとで、採集した木の葉を付け、全体のバランスを整えていった。

完成した作品を、館外に持ち出し、思い思いの場所に設置してもらった。その際「制作した木が一番綺麗にみえる場所、または作品を置くことで魅力的に変化させたい場所を自分で選んで植えて

ください。」と声掛けをし、場と作品との関係を意識させるようにした。その結果、本殿を意識して設置する人や、苔や水を借景にしようとする人、作品が場に溶け込むように草木の中に設置する人など、それぞれが自身の作品に最も適した場を選択していった。また、設置された作品を撮影しながら、親子で楽しく話し合う姿も見られた。



写真10 親子で制作をする様子



写真11 屋外に設置した作品

この、プログラムの大きな成果として、「親子で共通の題材に取り組めた」ことが挙げられる。親子で共に同じ道具を使って、素材に向かい合う機会は日常ではなかなか得られるものではない。子どもの制作の様子を保護者がただ見守るだけでなく、子どもの作品を手伝いながらも、保護者自身が制作を行うことで、親子間でのコミュニケーションや、より強い結びつきが生まれるのである。また、このような活動を地域の中で定着させることが、人々の意識を少しずつ変化させていくことにつながる。地域におけるプロジェクトの周知、ひいては芸術文化の振興にもつながっていくと考える。

(3)「親子でカラダ・コミュニケーション～一緒に遊んで身体・感覚づくり」

2016年の「KIDS MEET ART」では、執筆者の弘田も上記のように題して、日本古来の身体技法を参考に、親子のできるボディワークを行っている。弘田は主に保護者対象に子どもを抱いたり、持ち上げたりする際のコツなどを伝えた。さらに保護者には、ダイエットやスポーツへのヒントも質問に答える形で指導した。このワークショップでは、子ども中心というよりは、保護者を対象にしたものであった。子どもたちは親がやっているワークに独自の興味の持ち方で参加してくる。また興味がなければ、少し離れたところで遊んでいる。もちろん、別のスタッフが安全には留意しているが、そのような仕掛けで、日常の子ども中心のつながりを見直すという意図がある。保護者たちは、自分たちのワークを行いながら、少し離れたところにいる子どもたちの様子を目をやり、一人にいる子どもと保護者自身の姿もいくぶん日常とは異なることで見直すこともできる。一度つながりをほどこき離れることで、別のつながりの仕方に思いをやる。このようなことはこの「KIDS MEET ART」のコンセプトの根幹に関わるものであると考えている。



写真12 大人がハイハイをしていると
子どもたちもその上に乗ってきた

4 「子どものためのクラシックコンサート」

本研究は、パドマ幼稚園および城南学園幼稚園でのクラシックコンサートを振り返り、子どものためのコンサートを考えるものである。また、来場者の保護者に行ったアンケート結果を基に、保護者や子どもたちのニーズ、今後の支援のあり方を検討していく。

4-1 KIDS MEET ART 2016「ゴロゴロゆるゆるコンサート～ゆりかごクラシック0.1.2～」

日時：2016年8月27日 10：30～11：30

対象：0～2歳の子どもと保護者

場所：パドマ幼稚園講堂（大阪市天王寺区）

編成：S p、V n、P f

- プログラム：① パドマ幼稚園の先生によるコーラス「虹」
- ② 「ホフマン物語」よりオランピアのアリア/オッフエンバック
 - ③ おもちゃの交響曲/L. モーツァルト
 - ④ チャールダッシュ/モンティ
 - ⑤ パドマ幼稚園の先生による合奏
 - ⑥ 音楽付き絵本朗読「まてまてまて」「しあわせならてをたたこう」
 - ⑦ パドマ幼稚園の先生による手遊び
 - ⑧ パドマ幼稚園園長・應典院住職によるお坊さんのお話
 - ⑨ 「動物の謝肉祭」より終曲/サンサーンス
 - ⑩ 童謡メドレー
 - ⑪ 会場全員で「となりのトトロ」よりさんばを合唱

このイベントは、音楽の教員である山田が主導して行った。KIDS MEET ARTの枠組みで行い、

パドマ幼稚園の講堂を演奏会場とした。当日は0～2歳までの乳児を中心に約140名を越える来場者であった。乳児を飽きさせない1～2分のプログラムで構成するようにした。クラシック音楽は11ある内の4プログラムであるが、その内三つを前半にもってきている。

聴き手が0歳児からの乳児を対象にしたコンサートということで、出揃ったプログラムをどこに配置するかということに、山田は重要性を感じていた。保護者の多くはおそらくコンサートの前に赤ちゃんのおなかや睡眠の具合を整えて来場しているだろうが、冒頭にあえて耳慣れないクラシック音楽をもってきている。KIDS MEET ARTのコンセプトとも絡めて、子どもに馴染みがある曲ではなく、少し違和感があるプログラムをぶつけることで子どもの中の非日常感を覚醒させたいと言う思いからそのように仕掛けている⁵⁾。

また、プログラムには視覚的な部分も重視した。例えば、②オランダのアリアでは、ソプラノ歌手がゼンマイ仕掛けの人形に扮し、③おもちゃの交響曲では日頃乳児に馴染みのあるラッパのおもちゃや太鼓、水笛などが登場する。⑩童謡メドレーではソプラノ歌手が自ら曲に因んだアイスクリームやバナナを手作りし、ちょっとした演技を混ぜながら演奏した。また、舞台上にスクリーンを設置し、⑥⑨⑪のプログラムでは映像も活用した。

全体を通してみると、1時間という決して短い時間ではなかったが、途中で退場した来場者はほいなしと聞いている。つまり、子どもの集中力もそれほど途切れなかったということであろう。1～2分の短いプログラムを素早く展開させたことや、プログラムの内容について良かったと振り返ることができる。



写真13 コンサートの様子



写真14 パドマ幼稚園の先生も出演した

4-2 城南学園幼稚園招待保育「リトルクラシックコンサート」

日時：2017年5月13日 9：30～10：15

対象：未就園児と保護者

場所：城南学園幼稚園遊戯室（大阪市東住吉区）

編成：S p、F l、P f

プログラム：アルルの女/ビゼー

「トゥーランドット」より誰も寝てはならぬ/プッチーニ

城南学園幼稚園の先生による手遊び

音楽付き絵本朗読「しあわせならてをたたこう」
城南学園幼稚園の先生によるふれあい遊び
「ホルベアの時代」より前奏曲／グリーグ
童謡メドレー
会場全員で「となりのトトロ」よりさんぽを合唱

4-1 のゴロゴロゆるゆるコンサートのプログラムと同様に、クラシック音楽三つの内二つを冒頭に配置した。また、城南学園幼稚園の教員の出演協力もあり、手遊びやふれあい遊びの披露があった。特に、ふれあい遊びでは保護者も子どもたちもとてもリラックスした様子で楽しんでいた。二つのコンサートを終えて分かったことは、コンサートにおける1曲目がどのような役割を担っているかだ。例えば、4-1 のゴロゴロゆるゆるコンサートはパドマ幼稚園の先生方のコーラスで始まり、2-3 曲目がクラシック音楽で構成、4-2 のリトルクラシックコンサートでは、1-2 曲目をクラシック音楽で構成するまったく違う系統のプログラムで始めたことによって、1つ目のプログラムの雰囲気はコンサートの雰囲気づくりに大きく影響するのではと感じた。

また、4-2 のリトルクラシックコンサート終演後には、26組の保護者へのアンケート調査を実施した。内容は以下の通りである。

①「本日のコンサートはいかがでしたか」

大変良かった 19 まあ良かった 1 普通 2 良くなかった 0 回答なし 4

②「本日のイベントはどこで知りましたか」

ホームページ 10 チラシ 5 知人の紹介 3 ポスター 2 フェイスブック 1

その他 4 回答なし 1

③「本日のイベントに参加した理由は何ですか（複数回答可）」

城南学園幼稚園で開催されているから 22 子どもが音楽を好きだから 14

保護者が音楽を好きだから 9 子どもを芸術に触れさせておきたいから 13

その他 1

④「保護者の方が良いと思われたプログラムはどれですか（複数回答可）」

クラシック曲目 14 クラシック曲目以外のプログラム 25

⑤「お子さまの反応が良いと思われたプログラムはどれですか（複数回答可）」

クラシック曲目 2 クラシック曲目以外のプログラム 22

⑥「今後もお子さまと一緒にクラシック音楽のコンサートに行きたいと思いますか」

はい 21 いいえ 0 回答なし 5

このアンケートで、考えておかなければならないのは、④の保護者の方が良いと思われたプログ

ラムと⑤の子どもの反応が良いと保護者が思ったプログラムであろう。「KIDS MEET ART」でのコンサートと同様に、あえて違和感があるであろうクラシック曲目を冒頭から配置していた。演奏者の意図としては、やはり日常聞いているものではないものに触れてほしいということがある。このアンケートでは、子ども直接の反応ではなく、保護者が見て取った形の反応ではあるが、クラシック曲目に対する子どもの反応はあまり良いとは言えない。この良いとは言えないことをどう捉えるかには、いくつかの見方があるが、やはり導入などを工夫する余地はあるのだろうと考える。

また、量的アンケートに加えて、自由記述欄も設けて、保護者に書いてもらっている。加えて、演奏会直後にインタビューを行ってもいる。全てを紹介することはできないが、そちらでは「子育て支援センターでもクラシック音楽を聴きたい」「楽器に触れられたり、参加できたりする音楽イベントがあったら良い」という意見が目立っていた。このような自由記述やアンケートを踏まえると、保護者としても子どもにクラシックや楽器に親しんでもらいたいと考えていることが窺える。そこから、実際に好む日常で聞くような曲目のプログラムとクラシック音楽への想いへのギャップをどううめていくかが執筆者の今後の課題と感じた。保護者も子どもたちもクラシック音楽をもっと主体的に楽しむことができれば、このギャップを少しは解消できるのではないかと考える。そのギャップ解消には、今回も取り入れている幼稚園の教員たちによる手遊びや音楽を使った親子のふれあい遊びが良いヒントになるのかもしれない。今後は、アンケート調査の結果も踏まえて、今後は援助の方法を変化させてコンサートを行いたい。

5 おわりに

造形分野では、子どもと大人が同一の題材に取り組むことで、世代ごとの素材に対する感じ方や発想の違い、共作体験による充実感を得られることが分かった。制作という共通の手段を通して、楽しみながら保護者が子どもたちとコミュニケーションをとることが、結果として多様なニーズをもつ子育て世代の支援につながるのである。

音楽分野では、保護者の子どもとクラシック音楽を楽しみたいが、楽器に触れる機会があるなどの子どもの主体性を引き出すコンサートでクラシック音楽に親しんでいきたいという思いがあることが分かった。また、多くの保護者が身近な童謡や手遊び、音楽を使った親子のふれあい遊びなどで、身体を動かしたりリズムを感じることや、音楽を通じて親子のふれあいを求めていることも分かった。

さて、ここまで執筆者たちが行ってきた地域と家庭と大学をつなぐアートの役割と意義について具体的に紹介および検討をしてきた。地域と家庭と大学をつなぐことが本当にできたかどうかに関しては、もっと突っ込んだ検証が必要になると思われる。またイベントの内容もさらに充実させていくことが求められるだろう。だが、本稿では、ひとまずここで取り上げたイベントが、身体的な一体感や非日常への変容感を生み出すアートの場を作り出すことができたことだけを確認して、詳細な検証等は別の機会で行うこととしたい。

謝辞

本研究は、平成28年度前川財団家庭・地域社会教育助成「アートによる子育て支援を中心とした街づくり」(研究代表は村上佑介) によるものである。

註

- 1) 弘田陽介「商店街と大学と家庭とをつなぐ—大阪・駒川商店街内子育て支援スペース‘JONAN こどもひろば Komaクル’のチャレンジ—」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第50巻, 2016.
- 2) 佐藤忠良「触ることから始めよう」, 講談社, 1997, pp.8-9.
- 3) 同上書, p.9.
- 4) 弘田陽介, 山田(北谷)千智「子どもとアートの出会いの場を形作る KIDS MEET ART、キックオフ」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第48巻, 2014. および、村上佑介「サイト・スペシフィックなワークショップの実践—キッズ・ミート・アート2016の事例—」『大阪城南女子短期大学研究紀要』第51巻, 2017.
- 5) ここで、“耳慣れないクラシック音楽”と書いたが、本当に耳慣れなかったのだろうかという疑問が後に浮かんだ。もしかしたら、日頃からよくクラシックコンサートに出かけ、家でもクラシック音楽に親しんでいる子どもがいたかもしれない。また、そういった子どもがいたとしたら、どれくらいいたのかなど、今後アンケート調査の機会があれば聞いてみたい。クラシック音楽が地域の子育て家庭にどの程度浸透しているのかを知る機会でもあると考える。

(むらかみ ゆうすけ：講師)

(やまだ ちさと：講師)

(ひろた ようすけ：福山市立大学・准教授)